

「あなたの苦難を主にゆだねよ」

使徒行伝 14章19節～28節

説教 本庄侑子牧師

毎週水曜日に次聖日の週報原稿のチェックをしていただくために、役員・グループ長の兄弟姉妹にメールを送っています。先週のメールで私は「祈ってほしい」と助けを求めました。先々週から複数のキリスト教主義の学校で説教をしています。教会とは違い、生徒たちの多くは説教を聴きたいから座っているわけではありません。教会で語るのとは違う種類のエネルギーを使って、脱力感を感じていたのだと思います。

その翌日から私の元気は回復しました。メールを読んだ兄弟姉妹の祈りを通じて、主が助けをくださったと素直に信じることができました。また、一人の姉妹の証しにふれ、共に祈ることで、心にしみ入るような慰めを得ました。私たちはそうして、交わりの中で神様への信仰が回復されます。また、兄弟姉妹の祈りの中で信仰を支えてもらっているのです。

次週は聖霊降臨祭です。神様は主イエス・キリストを復活させて、聖霊を注ぎ、教会を立ててくださいました。私たちが一人で苦難に立ち向かわなくてもよいように、群れを立ててくださったのです。

パウロとバルナバは、主イエス・キリストの福音を伝える旅をしていました。その旅の中で石を投げられたため、パウロは倒れました。そんなパウロを弟子たちが取り囲むと、パウロは起き上がり、旅を続けました。弟子たちの祈りに囲まれて、主に救い出していただいたのです。

現代の日本社会では石を投げつけられることはありませんが、キリスト者であることで無言の圧力を受けることがあります。また、神様の基準で生きること世のめざす方向と衝突することがあります。

私はキリスト者の家庭に生まれたものではありません。日曜日ごとに教会に行き、週の半ばにお祈り会に行くことに対して、家族はいい顔をしませんでした。教会は一人前の人間が趣味として通う所であって、社会人として半人前の私が熱心に通うべき所ではない、とのことでした。そんな中、新年を迎える時、「新年礼拝に行きたい」とは言えませんでした。新年には家族そろって過ごすことを当然とする家の雰囲気があったからです。教会の人に「来るのは無理だ」と伝え、「祈っているよ」と言われていました。

新年こそ神様の言葉を聞いて始めただけなのに、どうしてかなわないのだろう。でも、信仰に導かれていない家族には意味が分からないのも仕方ないこと。ああ神様、私はもう疲れてしまい

ました。大晦日の夜、とてつもない虚しさに襲われて涙がとまりませんでした。

夜が明け、正月の朝、家族でテレビを見てみると、新年の各地の様子が伝えられていました。お寺や神社の様子に続いて、長崎の教会の様子が映りました。かつて迫害で多くの人が命を落としたが、隠れキリシタンによって信仰が受け継がれたと紹介されていました。家族の間に気まずさが漂う中、祖父が言いました。「キリストさんも新年に礼拝すんのか。あんたんとこの教会もあるのか。行かんでええのか。」

思いもよらず、新年礼拝に行くことになりました。自分といえば、虚しさに襲われて力を失っていただけでした。神様がしてくださったとしか言いようがなく、教会の祈りに取り囲まれていたのだとも思いました。

この後、パウロとバルナバはわざわざ遠回りをして、これまで立ち寄った先を訪ねていきました。苦難の中で信じる気力を失うことがないように、皆を励ましに帰ったのです。「わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならぬ。」(22節)神の国に入るために、頑張る苦難を克服していかなければならぬ、というのではありません。神の国に入る約束の中に生き始めている者にとって、苦難にあうのは当然のしるしだ、ということです。

「教会ごとに彼らのために長老たちを任命し、断食をして祈り、彼らをその信じている主にゆだねた。」(23節)パウロは自分がいなくなっても、互いに信仰を励まし合えるような教会の体制を作り、祈って、教会をまるごと主に委ねました。長老たちに、頑張る指導するようにと命じて去ったではありませんでした。教会は、そこに立てられている指導者たちも含めて、主のものだからです。

主イエス・キリストは、十字架の死をも引き受けて、私たちの罪を贖い、復活し、今も天においてこの世を治め、救いの完成に至らせるために、生きて働いておられます。教会は、その主のものとして結び合わされています。今週の歩みにおいても、苦難があるかもしれません。しかし、私たちは福音を前進させておられる主の御手のうちにあります。苦難の中にあっても、主が共にいて、教会の交わりの中で、神の国に入る道を歩ませてくださいます。

(記 説教要約奉仕者)